

堀尾輝久が語る

戦後五十年の大学の軌跡をたどる④



聞き手 編集委員 田子 健

私の学部生時代

—— 新制大学の歩みをたどろうとするときには、どのように時代を区分するのが適切なのでしょう。

堀尾 まずは戦後の新制大学の発足ですね。ある意味ではカオス的な状況だったわけですが、そこにはさまざまなか後改革と通じる面白さがありました。そして少し落ち着いてきたところで六〇年安保の騒ぎが起きるわけです。その次の区切りは六八〜六九年ごろの大学紛争。もうひとつ上げるならば八〇年ごろということになるでしょう。七九年

の共通一次の導入については言うまでもないことですが、ちょうどこのあたりから教育を商品として捉えようとする動きが顕著にみられるようになってきたという点も含めて。そしてこれは現在進行中のことですが、九〇年代に入ってから大学の審議会の矢継ぎ早の改革案、大学設置基準の弾力化、教員養成大学の変化、大学院大学構想、国立大学独立行政法人化といった動きは、十八歳人口の減少ともあいまって、戦後日本の大学史での大きな転換点となることでしょう。ごく常識的で平凡な区分ですが、やはりこういうところに落ち着くのでしょうか。

—— それでは順を追って新制大学発足のころのお話から

お伺いしたいのですが、先生は新制大学の第何期にあたられますか。

堀尾 三期生です。

—— そのころの学生たちの様子はいかがでしたか。

堀尾 それこそいろんな人がいた、としか言いようがないですね。旧制高校からそのまま横滑りの人もいるし、それ以外のコースから来た人もいます。戦後すぐにはいわゆる左翼学生がたくさんいたでしょう。クラスメートの中にも、学生運動に猛烈に突っ走っていく人がいました。ですが私は彼らにはついていけませんでしたので、彼らとは距離をおきながら馬に乗っていたというところでしょうか。



●ほりお・てるひさ●1933年生●1993年ま●専攻は教●は教
育部・教育哲学に在籍●現在を担当●日本会議前代表●(92～)『日本の教育』(98)●研究所と構造●思想と構造●主教育の思想●主教育の思想

—— 馬に乗って、と言われるすと。

堀尾 駒場に入っただけで私は馬術部の門を叩きました。

というのは、東京に来て私には寮に入るより方法がなかったのですが、そのころ大学の寮には運動部の学生が優先的に入れたからです。で運動部はいいとして、それではなぜ馬術部かということですが、私の父は軍隊の獣医だったので、父は私が六歳だった一九三九年に戦病死したのです。日中戦争が始まる前の平和な時代には退役して競馬場の獣医をやっていましたので、私も小さいときから馬には親近感があったというわけです。

—— 先生は法学部を卒業されたあとに教育学部の大学院に進まれたとのことですが、そのあたりの事情をお聞かせいただけますでしょうか。

堀尾 私は高校時代にあることがきっかけで教育に強い関心を持つようになったものから、大学に進むときには教育を勉強したいということで兄に相談しました。すると法学部にいたその兄からは、教育をやるにしても広い視野でやる必要がある、そして大学は東大がいいだろう、だから俺についてこい、という手紙がきたのです(笑い)。

—— 教育に関心をお持ちになられたきっかけとはどのようなことなんでしょうか。

堀尾 そのひとつは、私の高校のクラスメートが自殺未遂をしたという出来事でした。彼はある意地悪な先生にじめ抜かれた結果そのような行動をとってしまったのですが、自分ならもう少し高校生の心情を理解することのできる教師になれるのではないかとそのときに思ったのです。そしてもうひとつは、非常に優秀だったにもかかわらず経済的な理由で大学進学を断念しなければならなかった友人がいたことです。そのころ日本はまだまだ貧しかったわけですが、こうしたことにはいろいろと考えさせられました。

—— たしか東大では、駒場から本郷に進むときに進路を変更することも可能ですね。

堀尾 ええ。それで三年生になるときに教育学部が変わるかとも考えたのです。そのときたまたま「俺の寮に教育学部に進む奴がいるから、少し彼の話でも聞いてみれば」とクラスメートに紹介されて会ったのが稲垣忠彦さん。ですが話を聞いたり彼の本棚に並んでいた本や雑誌を眺めたりしているうちに、自分のやりたいことはどうもそれとは違うなどという感じを抱きましたので、結果的にはこのときにも決断を延ばしたことになりますね。

—— 法学部でのご専攻は。

堀尾 丸山真男先生のゼミに入れていただくことになりました。

した。「日本におけるナシヨナリズムとファシズム」というゼミのテーマにすごく関心があったのです。というのは、そのことは自分の生い立ちとか家族に深く関わることもあったからです。敗戦後しばらくは、戦争の問題にしても軍部の責任だけを強調する雰囲気があったでしょう。しかし私としては父が戦病死しているじゃない、また他の兄たちも職業軍人だったので戦後は公職追放されていたものですから、戦前の軍人の責任ということで断罪する一面的な捉え方に対してはある種の反発がありました。入ゼミ希望者が出す趣意書にはそういう思いを率直に書いたのです。おそらく趣意書はかなり変わったものになったと思います。おそらく趣意書は合格した三年生は私だけだったということは、丸山さんはそのような趣意書を評価してくれたのでしょうか。

—— やはりそのようなお考えは当時としては少数派だったのでしょうか。

堀尾 そうだと思えますよ。あえて色分けをすれば右寄りと思われかねない趣意書だったということになるのかもかもしれませんね。でも面白いですね。大学時代の同窓会をやりますと、今では私が一番左ということになるようですから（笑い）。大学時代の友人たちはほとんど法学部ですから、

派手なことをやってもみんな最終的には官庁か大企業あたりに収まるわけでしょう。どこでどういうふうに変わっていったのかは分からないですけども、今では体制派ばかりですからね。そういうのも本当は大学教育問題のひとつとして考えた方がいいのかもしれないね。青年期に受けた教育は学生たちにどのような影響を与え、その影響はどのように続いていくのか、あるいはどのようにして変わっていくのかといったことをね。

安保闘争のころ

堀尾 自分のことをもつと見つめてみたいと思った私は、モラトリアム気分も手伝って法学部を卒業したあとは教育学部の大学院に行くことにしました。それが一九五五年です。大学院に進むにあたっては法学部に残ることも考えたのですが、ひとつには丸山さんが大病をされていて、ゼミでそのまま引き続いて研究をすることができそうな状況ではなかったこと、そしてもうひとつは教育学部のほうがたっぷり時間がありそうな感じがしたのでこちらを選んだわけです。といっても法学部の政治学科から移るわけですから、教育の中でもたとえば教育行政といったような社会



科学的な領域に進むのが自然だったのでしょね。ですが勝田守一先生のもとで教育哲学を専攻するようになったのは、自分を見つめ直したいという気持ち強く抱いていたからです。ただし大学院に進んだきっかけがそうであるとしても、自分自身の内面に直接的に関わってくるような問題をそのまま研究の対象にしようとは思いませんでした。自分を相対化して捉えるためには、精神的にも時間的にも十分な余裕が必要ですから。

—— 先生が大学院に進まれた一九五五年というのは、社会が大きな転換期を迎えようとするころですね。

堀尾 憲法や教育基本法などに対する攻撃があらさまなものとなり始めた時期でもあります。戦後改革の精神が大きく歪められようとしていた時代でした。一九四五年の敗戦のときは私は旧制中学の一年生でしたが、がちがちの軍国少年であった私も大きな価値転換を強いられたわけです。敗戦になって民主化が進められていきますね。たとえ

ば中学一年のときには教科書の墨塗りを通して価値観の転換を体験したのでした。また高校時代には、もちろん古い考え方の先生も少なからずいましたけれど、生徒が中心になって生徒会の規約を作り校章も替え、といったような経験をしているわけです。そしてその後の学生生活を通してもとの軍国少年がようやく民主主義的な価値観を身につけることができ始めたかな、といった時期に生じた社会の揺れ戻しだったわけですので、そのような動きには敏感にならざるをえなかったのだと思います。私の大学院時代とくにドクターのころは、戦後民主主義が変質させられようとしているときでした。教科書検定問題などが深刻になってくる時期でもありました。そんななかで私は、教育の自由とはなにか、教育と国家の関わりはどうあるべきかという問題意識から博士論文に取り組むことにしました。人間教育の原理がどのようなメカニズムで国家主導の教育に変質していくのかを明らかにしなければと思ったからです。日本とヨーロッパを串刺しに批判できる原理は何かと欲張ってもいきました。

—— そうしますと、先生が博士論文をお書きになっていくところがちょうど六〇年安保ということになるわけですね。

堀尾 ええ。政治学科を卒業したとはいえ政治のことはよく知らなかった私も、安保の問題なんかを通して少しずつ分かり始めたかな、という感じのときでした。そのころ私は胸の病気にかかってしまいました、一年ほど療養所の世話になりました。六月の国会突入のときには病院の中でテレビを見ていましたが、樺美智子さんのことは鮮明に覚えています。

—— あのころは東大の先生たちもずいぶんデモに参加されましたね。

堀尾 たとえば丸山さんも肺を切除したあとのがたがたの体にもかかわらず、復初の説、すなわち戦後改革の精神に帰れと叫んでデモに参加されていました。東大法学部の教授がデモに参加したなんてことは後にも先にもない、まさに空前絶後のことだったわけです。ああいう事件がなければね、私はアメリカに留学した可能性が高いように思いますが、私はいまは、東大とスタンフォード大学との間で戦後教育改革に関しての共同研究がありましたでしょう。そのころ私は大学院生だったので、お手伝いつまりアルバイトとしてその研究に参加していました。最初のころはパイロット・リサーチ的な研究のために来日された哲学の先生の助手として、教育理念に関する資料の収集などを

していたのです。ですからそういうルートを使うこともできずはすし、またそのころはアメリカに留学しようと思えば割合に簡単だったのです。けれども安保をめぐってスタンフォードから来ていた先生たちと大論争になって、私は帝国主義的なアメリカがすつかり嫌いになってしまいました。そのようなことも思い出として残っています。

—— その共同研究は、『戦後日本の教育改革』という十冊シリーズの大きなものに纏められたお仕事ですね。あれは戦後の東大教育学部が取り組んだ中の一歩大きな業績であると聞いたことがあります。

堀尾 そうかもしれませんね。ですが総力を挙げてということでは決してなくて、日米共同の研究をこの時期にやるのはいかかなものかという疑問を持っていた人たちは最初からいたわけです。あんなものに参加するとはけしからんと私たちを批判する声も耳に入りました。また私たちにもプロジェクト自体に対する疑念が全くなかったわけではありませんで、自分たちはたんに資料収集などのアルバイトにすぎないという言い訳をしながら参加していたようなところが一方であるんですね。ですが最終的には、私も含めて多くの助手・院生クラスが執筆に参加しなければならぬはめになってしまったのです。当初は執筆は教授が

するということだったのですが、全く書かない教授が何人もいましたね。また私のところについて言えば、担当の勝田先生が病気になるまで一番遅れた部分だったのです。しばらくはそのままにしておいたのですが、そのうち勝田さんが亡くなるまで、東大出版会からはさかんに催促されるし。そこで山住正己さんに入ってもらって、二人で「教育理念」の巻を書いたわけです。

カリキュラム改革と大学紛争

堀尾 博士論文にパスして一九六二年から駒場の教壇に立つことになったのですが、それからしばらくして教養学部内では、一般教育のカリキュラム改革をやるとうとう動きが現れました。野上茂吉郎学部長が先頭に立つかたちで若手の元気のいい人を集めて改革委員会ができたり、また一般教育研究センターを作るための準備会が設けられたり、といったようなことがありました。

—— 一般教育の改革の狙いはどういった点にあったのでしょうか。

堀尾 たとえば社会科学系に進むにしても人文科学や自然科学の素養を身につけておいて欲しいし、人文系や理科系

に進む人についても同様である、という発想は正しいわけです。そのような目的で設けられた一般教養科目は、新制大学のカリキュラムとして特筆されてよいと思います。私の学生時代の経験から言っても、いわゆる一般教養科目は結構面白かったですね。ですが一般教育は次第に形式化してきたと指摘されることが多くなりました。加えて外圧的なものとしては、大学は一般教育という高校の延長みたいなことをやって専門教育をおろそかにしているという批判もありました。それらに対して私たちとしては、大学の前半が教養で後半が専門ということではなくて、専門を核とする新しい教養のあり方、そしてまた専門を超えて学問領域を広げていく際に役立ちうるものとしての教養のありかたを考えようとしたのです。その結果カリキュラムそのものを総合化する必要があるだろうということになったのです。

—— カリキュラム改革は順調に進んだのでしょうか。

堀尾 総合学習的な視点を探り入れようとして動き出した矢先に、六八年からの紛争によって中断してしまいました。また一般教育研究センターを作る計画も準備会の段階で潰れてしまいました。というわけであの紛争に対しては、せっかく大学の内部から改革の動きが出てきたところを暴力的に潰されたという悔しさを感じています。やがて長かつ

た紛争も終結するわけですが、そのときには総合学習的な科目を前面に出して授業を再開しようということになりました。たとえば「近代日本の歩みと学問」といったテーマが設けられたときには、私はそのトップバッターとして「明治啓蒙期における学問と教育の発展」という内容の講義をしたこともありました。

—— その総合科目化の試みは成功されたのでしょうか。

堀尾 そういう問題意識でもって総合的に学習してもらおうという考えそのものはよかったですのではないかと思いますけれどもね、結局はあまり長続きはしませんでした。学生の側にもカリキュラム委員会というのができまして、彼ら要求学生の科目も開講するようにしたのですが、そのうち学生側の要求は次第に少なくなっていきました。

—— 学生の希望によって開講されたものにはどんなものがあったのでしょうか。

堀尾 たとえば南北朝鮮問題といった政治がらみのことは



いくつもありましたね。また私も「平和と教育」というテーマでゼミをやっていました。ただし開講することのできる科目の数は当然限られてきますから、たくさん要求が出てきたときには折衝して絞ったりすることはありました。

—— 六八年からの大学紛争はどのように総括すればいいのでしょうか。

堀尾 たえばフランスでは六八年前後ということと戦後史を大きく区分したりすることがあるんですね。六八年の Париは紛争そのものも激しかったし、その後の社会に与えた影響も大きかったです。またそのころアメリカなどでも大学紛争がありました。そういう世界的な動きの影響を日本が受けたことは間違いないでしょうね。もともと日本の大学紛争の直接的なきっかけというのは、ひとつは東大医学部の処分問題です。その場になかった学生を処分してしまっただけですが、真相が明らかになっても決定を覆そうとしない権威主義的な教授会に対して怒りが吹き出したのでした。それからもうひとつは日大紛争です。マスプロ教育を平然と行なう大学の態度に対して痛烈な批判を加えたわけですね。この二つはそれぞれ根拠があった問題提起だったと思います。とはいえ当時の大学紛争を、教授会と全共闘の対立という構図だけで捉えて欲しくないで

すね。ジャーナリズムなどは、何もやろうとしない大学に対して全共闘学生が改革を求めたというところだけを強調しがちですが、改革派の学生にも暴力をめぐって対立があり、また教授会の中でも改革の可能性を探って激しい論戦が続いていたという側面を見落としてはいけないと思います。運動を進めていく過程で学生たちは大きく割れてしまいうわけですが、教師の側にも少数ですが全共闘シンパの先生がいて対立したりもしました。教授会の中でも改革派と保守派の摩擦があったわけですが、最終的には暴力反対ということで全共闘派に対して共同行動をとることになったわけです。ですから全共闘の闘争として捉えるだけの一面的な見方に対しては、それは違う、教師も大学改革に取り組んでいたことを忘れないで欲しい、と言いたいですね。暴力行使は少なくとも結果的に機動隊の学内導入を招き、紛争終結後の大学管理強化の呼び水となってしまったのは残念なことです。

八〇年代以降の状況

—— そして次の区切りが一九八〇年前後というわけですね。

堀尾 マークシートの点数競争主義によって、深く考えることをしなくなった学生を大量に生み出したとして非難されることの多い共通一次については改めて述べるまでもないと思いますので、時期的には少しあとになります。ここでは教育の商品化という発想が広がっていったという点を上げておきたいですね。さすがに小学校の教育まで商品であるとは言っていないかと思いますが、とくに大学教育に関しては学生消費者主義といえます。高い授業料を払ってきているお客であるという面が強調されるわけですね。またその一方で文部省までもが受益者負担ってことを強調し始める始末ですからね。私は文部省が受益者負担原理を掲げて国立大学の授業料をどんどん上げるようになったことは、大学観・学問観を大きく変える重要な出来事だったと考えています。そして学問の商品化という考えが徹底していけば、そのうち良いものは高い、悪いものは安いという考え方が当然のものになっていくのでしょうか。臨調行革がらみで国鉄や電電公社などいろんなものが民営化されて行きましたが、教育もそこから逃れることは難しいということになるのでしょうか。

—— 最近の雑誌に自民党のあるお偉いさんが、たしかこんなことを書いていました。それは、小学校の校区制を廃



止して広い地域内で学校を自由に選ばせるようにすれば、いくつかの小学校に児童が集中して数年後には小学校の統廃合が必ず起きるから、廃止されるほうの小学校を民間に売却して新たに私立小学校を作らせる。そしてそこに政府はいくらかの補助を出すようにするならば、初等教育の改革は財政面からも可能となるといった趣旨のことでした。堀尾 いやあ（笑い）。まったく私たちが勘繰りに予測していたとおりですね。まさにそういうことなんですね、八〇年代以降の教育部門の民営化論というのは。よく規制緩和ということが言われますが、「教育の自由」に関わる問題と、教育の商品化を意味する「教育の自由化」ということがらが、あるときには意図的に混同させられたりしているものですから、規制緩和という言葉を使うときには注意しなければならぬのです。たとえば教科書の問題に代表されるように、がんじがらめの規制は困るということで文部省の統制を批判するさいにも「規制緩和」。受益者負担論

を推し進めたり、自分たちの新しいビジネスの場を切り開こうとするときにも「規制緩和」ならよいのですが。これでは話が混乱しかねません。

—— 統制によって画一化された教育を受けてきた学生たちへの刺激剤としては、留学生や帰国子女の存在にも期待がかけられます。彼らのおかげで日本の大学も海外と比較することができるとし、またその矛盾もはっきりと現れるようになりますね。

堀尾 帰国子女というのは面白い存在だと思います。ゼミでの態度を見ていると外国人の留学生と同じように非常に積極的に発言するし、一般の学生に対してはなんでそんなに黙って入っているのかという反応を示すしね。学生たちにとってはもちろんいい刺激となるでしょうが、私たちにとっても日本の学生をどう教育すればいいのかを考えるさの貴重な参考材料を提供してくれます。

—— 先生の授業には留学生や帰国子女はたくさん出席しているのでしょうか。

堀尾 私は国際教育論というのをやっていますので、留学生や帰国子女も数多く顔を出してくれています。もともと留学生のほとんどはアジアからの学生ですので、話はどうしてもアジアを中心としたものになりがちですが。

—— 最近では大学の側も、たとえばアジア学科といったようなものを作ったりしてアジアに目を向けようという動きが強くなっているようですね。

堀尾 これまでは欧米との結びつきの強化を優先しがちだったのですが、アジアとの連携をどうやって強めていくのかは今後の大きな課題でしょうね。ただそのための前提としては、私たちの価値観や世界観を明らかにして、その中でアジアをどのように位置づけているのかを示すことが欠かせないように思います。アジアの国々と本当にうまくやっついていこうとしているのかどうかを疑問に思っている留学生は決して少なくはないでしょうね。こういう緊張があるんですよ。日本の学生がたとえば戦前・戦中の日本が韓国や中国で何をやったかということを全く知らないため、うっかり質問して本人も恥もかくしひどいときには留学生を怒らせてしまう。そういう関係がすぐにできてしまいかねないので。ですから一番最初に問題提起をしたり質問したりするときには非常に気を使います。

—— 私たちの高校時代を振り返っても、たとえば近代の日中・日韓関係をきちんと教えてもらってはいないように思います。それはやはり蓋をしておこうという考えがその背景にあるからでしょうか。

堀尾 まず入試に出ない、時間もないというわけで、授業で真剣に取り組んでいる学校は少ないでしょうね。

—— このあたりの近代史については、いわゆる自由主義史観派がいろいろと言っているところでもありませんね。

堀尾 彼らはですね、日本の悪口ばかり教えていて自虐的だ、これではだめだとしきりに言っているでしょう。また彼らは、なにも日本だけがやったんじゃないって言い方をするでしょう。それに対して私は、そんな書き方はしていないよ、日本史の教科書にだって世界史につながる視点が あるんだから、それは帝国主義の問題としてきちんと捉えているはずだって反論しているのですが。日本は本当にひどいことをやった、これはけしからんというだけでは問題を残すことも確かです。ですからそれを日本史で学ぶ場合にも、たとえばイギリスはインドや南アフリカで何をしたのかといったことも視野に入れて、帝国主義そのものの問題として世界史と繋ぎながら話しをする必要があります。もちろんこれは、日本が責任を逃れるためにやるのではないことは言うまでもありません。

—— 自分の国のことも知らないようでは、国際化などできるはずありませんね。

堀尾 自虐史観批判派は、意識的な教師がとすれば教育

学的な配慮なしに侵略の歴史ばかりを押し付けているような授業になっていた、そしてそれに対する反感を持った教師もまた一方にいた、といった対立の構図をしばしば描くようですが、実はそれ以前の問題であって、多くの場合は何も教えられていなかったというのが実際の姿に近いのではないのでしょうか。

歴史感覚の養成

堀尾 歴史感覚を身につけさせる努力に欠けていたという点は、日本の教育における非常に重大な欠点ではないかと思えます。歴史を知らない。そして歴史的にみるという発想がない。もちろん自分を軸にして考えることが悪いというわけではありませんが、それだけだとともしればいわゆる「ジコチュー（自己中心主義）」に陥ってしまいます。歴史を振り返るにしても、未来からの問いにどう答えるのか、未来への希望をどのように見出すのかという思考に結び付かないとだめだと思います。過去を心に刻むことのみに目的があるのではなく、それは前に進むために必要なんです。この点は歴史教育にのめり込んでいる人たちにはやや欠けるくらいがあるように感じられたりもするのですが。

今の若者たちの間では、行き先はもう閉ざされているし先は見えている、だから現在満足できればそれでいいじゃないかという風潮が支配的でしょう。そうやってしまったのは、希望が持てないような世の中にしてしまった大人たちに責任があるのですが、たとえば古い建造物でも今に繋がる社会の制度でも何でもいいのですが、それらを通して先人の営み、そしてそこに込められている希望や祈りに思いを馳せてみようといったような思考回路があれば、その思考の先には、いま自分たちも何かやらなければならないし、またやれそうなおことはいっぱいあるじゃないかというようになつていくと思うのですが。もちろんこういつたことは十分なゆとりがないとだめなんです。マークシート式の解答を準備するような思考パターンだったら、自分自身を少し離れたところから見つめ直すということではできません。

—— やるべきものが見えてきたら、若い人たちはかなり一生懸命に取り組みますね。

堀尾 ですからボランティア的なものにも結構関心があるのはそういうことだと思ふんですね。自分の感じ方に自信が持てれば、その先には自分が本当に関わっていきたいものが見えてくるわけですね。若者すべてが金になるものだ

けにしか関心がないのかというと決してそうではなくて、人と関わる仕事、たとえば障害者の介護であったり子供たちの遊びに参加したりといったようなものに価値を見出す若者も少なくはないように思います。自分自身の世界を大切にする一方で、その取り組みが社会的な公共性にも繋がっているんだという実感を抱くことができれば、若者は素晴らしい力を発揮します。

—— 若い感性は世の中のさまざまな問題を敏感に受け取るのに、大人はそれを見なかつたことにしようとするものだから機嫌が悪い。そして大人のほうは、若い人たちが口に出してそれを言わないものだから何も考えていないと思つて不機嫌になる。両者が不自信を持つたままでならみ合っているものですから世の中だんだん暗くなる。とすれば真ん中にある大学の教師は、もつともつと希望を語らなければいけませんね。

堀尾 「日本の教育改革をとともに考える会」が教育改革提案を纏めました。その会議には高校生たちもときどき来ていたのですが、生徒たちの感想っていうのが面白いんですね。大人なんかもう信用できないって思っていた、でも大人たちの中にもこんなふうに分かつて自分たちのことを考えてくれている人たちがいることが分かつて感激したとかね。これ

は今言われたことと重なるでしょう。

—— 高校生や大学生からすれば、今の大人の多くはもはや相手にするような存在ではないみたいです。断絶という表現では平凡ですが、いわく言い難い垣根というか壁が立ちほだかつているようです。そんな中でたとえば授業なども従来と同じように漫然とやっていたのでは、ますます学生からそっぽを向かれるだけです。

堀尾 少し話はそれるかもしれませんが、私は今中央大学の法学部で教育法という授業もやっています。実は教育法という看板の授業をやるのは中央大学に来て初めてなんです。それはそうとその授業の自身が、法学部の多くの講義とは違うみたいなんです。教育法というのは法全体のシステムから言う行政法のサブにあたります。ですが私は最初の授業で、行政法のサブ・カテゴリーとしての教育法、すなわち行政法を適用して教育を法的に考えるというような授業を目指しているのではない、と断りを入れています。そうではなくて、教育の本質・教育の条理に即してそれにふさわしい法のありかたを考えようとしているのであるから、現実の法のありかたに対する批判を含めた教育法哲学とも言うのが適切かもしれない。導入部では戦後の教育の歴史と国家との関係を軸に係争問題を

話して、後半は判例のケーススタディを百人以上の教室で学生に報告させながらやっています。法学部では一方的な講義がほとんどでしょう。しかも解釈法が圧倒的じゃないですか。だからいささかうんざりしているような学生が聞いてくれてすごく面白かったと言ってくれたりするわけ。初めてだと言うんですよ、そういう授業は。

—— よくわかるような気がします。

堀尾 もちろん法学教育にはそれなりのふさわしいやり方があるのかもしれませんが、法律とは畑違いの私には分からない事情もあることでしょう。また、必ずしもこのやり方を気に入ってくれている学生ばかりではないのは当然だと思えます。私は何も自慢話をしたのではなく、それぞれの先生方がそれぞれの科目にふさわしい教育方法・講義内容を試行錯誤しながら、それを大学全体として広めていく努力が必要であるということを強調したいですね。

—— 大学の先生って何なんだろうな、どんなことを授業で話せばいいのか、自分は学生に未来への希望を語ってあげることができたかな、などといったことを考えさせられますね。今日はお忙しいところありがとうございます。

二〇〇〇年二月九日 全国教育文化会館（東京都千代田区）にて

記録・構成 梅田守彦